第３回

湯﨑知事と
「ひろしまの未来を語る」
（安芸高田市）

と き 令和２年12月１日（火）

ところ 安芸高田市民文化センター

クリスタルアージョ（小ホール）

目 次 頁

開　　会 ……………………………………………… 2

知事ビジョン説明……………………………………… 2

参加者① ……………………………………………… 5

参加者② ……………………………………………… 6

参加者③ ……………………………………………… 7

参加者④ ……………………………………………… 8

参加者⑤ ……………………………………………… 9

参加者⑥ ……………………………………………… 9

フリートーク ………………………………………… 10

閉　　会 ……………………………………………… 16

広 島 県

開 会

司会（穐丸）：　皆様,お待たせしました。

ただいまから「安心▹誇り▹挑戦 ひろしまビジョン」意見交換会、「ひろしまの未来を語る in 安芸高田」を開催いたします。

はじめに、本日ご参加の皆さんをご紹介いたします。

湯﨑知事から右手側、反時計回りで、出張一樹さんです。水藤邦夫さんです。竹本泉さんです。大前裕子さんです。出張雄都さんです。渡辺洋一郎さんです。

また、本日は安芸高田市長、石丸伸二様、広島県議会議員、玉重輝吉様にもご参加いただいております。

お忙しい中、誠にありがとうございます。

県のフェイスブックを通じて、ライブ配信を御覧の皆様からのご意見やご感想を募集しておりますので、フェイスブックをご利用の皆様は、ぜひ広島県の公式アカウントにコメントいただければと思います。

意見交換

司　　会：　続きまして、本日の意見交換をいただくテーマでございます。「安心▹誇り▹挑戦 ひろしまビジョン」の説明。その後の意見交換に入りますが、これからは湯﨑知事に進行役をお願いしたいと思います。

湯﨑知事、どうぞよろしくお願いいたします。

湯 崎 知 事：　皆さん、こんばんは。

だんだん寒くなってきた夜７時という最もおなかのすいた時間に、こうやってお忙しい中、お集まりいただいて本当にありがとうございます。

今日、来るところで、安芸高田に入って吉田の辺に来たら月がすごくきれいで、山の端に月が見え隠れして「ああいいな」と思いましたが、我々はこの部屋の中でやらせていただきます。よろしくお願いします。

今日のテーマであるわけですが、広島県では 10 年後の目指す姿、そしてその実現の方向性について、取りまとめた総合計画と呼ばれるものになりますが「安心▹誇り▹挑戦 ひろしま未来ビジョン」というものを 10 月に策定いたしました。このビジョン、広島県がもちろん策定しているわけですが、ただこれは県のこうなりたいという姿、それがどうなるという計画ですから作ってありますが、決して県がそれを実現するということではなくて、実現に実際に動かれるのは県民の皆様一人一人、あるいはは事業者の方々なわけです。

そういう意味で新たな県づくりは、皆さんと一緒にやっていかないといけないということでありますが、そのために我々の考えこうですよというのをご紹介しながら、皆様の率直なご意見もお伺いして意見交換をしながら、今後の施策の展開につなげていこうと、そういう趣旨でこの会をやらせていただいています。

今日で３回目になります。まだまだ固い雰囲気でやっておりますが、だんだんとこなれていけばいいと思います。スタートも秒読みとかあって、何かとても緊張感漂う感じでありますが、気軽にご発言いただければと思います。よろしくお願いします。

初めに私からビジョンのポイントについて、ご説明をさせていただきます。そのあとで意見交換をやらせていただきたいと思います。

この後ろのスクリーンを御覧いただければと思いますが、策定にあたっての背景というのがございます。これはいろいろなものがあるわけですが、ひと言で言うと、ますます不透明に予測が難しいとなってきている。人口減少だとか、グローバル化していく社会だとか、あるいはデジタル技術が急速に進んでいく、その中でも格差が課題になっている。世界で見るとアメリカとかヨーロッパの中で、格差が大きな課題になっていますが、日本でもそれが起きつつある。あるいは大災害が頻発したり、今回のようはコロナですね。本当に先が見通しにくくなっています。

そうはいっても、30 年後は我々どうなっていたいのだろうというのを、まず作りまして、30 年後なので抽象的にならざるを得ないですね。教育だって、あとでご紹介しますが「学びの変革」ってやっていますが、そういうものが全県に展開されていますとか、そういうことなのですが、30 年後にたどり着きたい姿をもう少し近くに引き寄せてきて、30 年後にこうなりたいところにいくまでに、10 年後はどうなっているのだろうという

ことを見通すというか、それを作ってそこに行くために今何が必要なのか、今との違いはどういうところか、それを 10 年かけてどういうふうにしたらいいのかを描いているのが、このビジョンであります。

今日は各論いろいろあるのですが、まず総論的なところをご紹介させていただきますと、基本理念はこちらにありますように、将来にわたって「広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かった」と心から思える広島県の実現。これだけ見てもなかなか具体性が分かりにくいと思いますが、さらにその中で目指す姿として、県民一人一人が「安心」の土台と「誇り」により、夢や希望に「挑戦」しています。

そして仕事も暮らしも。里もまちも。それぞれの欲張りなライフスタイルの実現ということをおいています。これは「安心」という土台、それから「誇り」これはエネルギーになっています。それを持って夢や希望をそれぞれ抱いて、仕事とかあるいはライフ、暮らしの中で抱いている希望があると思いますが、それを実現するように、チャレンジできるように、そういった姿を目指していこうということです。

里もまちもというのは、それが町であれ、あるいは中山間地域と呼ばれるところであれ、それができるようにしていこうということです。もう少し詳しくお話をしますと、ビジョンのポイント３つほどありますが、今申し上げたような、「安心」の土台と「誇り」の高まりによって、夢や希望に「挑戦」していく。この欲張りなライフスタイルは、今年度まで行っております「ひろしま未来チャレンジビジョン」というのがありまして、これが現計画、今お話している計画は来年度から始まる計画ですが、現ビジョンで欲張りというのが皆さん仕事と暮らしと、これまでどちらかというと、これは相反するものですね。

仕事を取ると暮らしがこう、仕事を一生懸命やると暮らしがこうなって、例えば子育てもちょっと諦めるとか、あるいは子育てとか介護があるから仕事を諦めるとか、そういったトレードオフのように受け止められがちなのですが、広島県ではどちらも 120%やりましょう。そういう意味で欲張りといっているのですが、それを引き継いで一人一人持っている仕事、暮らしの中の実現したいことは実現できるようにしていこう。

それから「適散・適集社会」これもあとでご説明しますが、都市と自然が近いということが広島県の特徴であり強みでもあるので、その中でコロナで気づいた分散って大事だよねということ、一方で一定の集中だとか集積も重要だよねということ、これを両方を満たすような「適散・適集社会」のフロントランナーになろう。

それから、いろいろな施策を行っていく上で、横串に刺している３つの視点があって、一つがデジタルトランスフォーメーション、デジタル技術の活用ということです。広島のブランド力を強くしていこう。それから人材育成これが鍵です。こういうことがポイントになっています。

まずこの「安心」ですが広島県、調査をすると多くの県民の皆様の満足度は結構高いのです。年々上がっています。しかしながら同時に多くの方が不安を抱えている。それはそうですよね先が見えにくいですし、健康だとかあるいは将来の年金どうなるだろうか、そういう不安があります。そういう意味では、まずはいろいろな不安を軽減して、安心をしていただくことによって夢や希望を持っていただく。そういうことが持てるように、そういうふうにならないといけないということで、まずは「安心」を作っていこうということがございます。

次が「誇り」ですが、広島県いろいろな強みがありまして、安芸高田も例えば神楽も非常に有名ですし、お米なども若干広島市に近いというところもあって農業も盛んで、非常においしいものもたくさんある。

歴史もある。発祥ではないですが毛利家が興っていったそこの基礎になったところであるとか、すごく豊かな地域ですが少し足を伸ばせは広島市、そういったいろいろな強みがありますが、広島県全体でもあります。

そういった強みを磨いていくことによって「誇り」を高めていく、それがいろいろなことに「挑戦」していくエネルギーなっていくと考えているわけです。

そういうことでこのピラミッドあるのですが、これを職員が一生懸命考えてくれたのですが、「安心」の緑の土台があって、青い「誇り」があって、オレンジの元気な「挑戦」という、そういうふうにつなげていこうということであります。

県民の一人一人が抱く、それぞれの夢や希望を諦めることなく、さらに一歩踏み出す、それを後押ししていこうということ、それが先ほど申し上げた、欲張りなライフスタイルの実現につながっていくということです。

もう一つ、里もまちもというところがありますが、これは県全体の発展をけん引するのは、やはり広島市だとか福山市だとか、そういう中核的な都市もありますし、それから中山間地域というものも、非常にいろいろな意味で重要な機能になっていますし、また人間らしい暮らしの実現ができるところ、そういうところをしっかりと作っていく。

それから広島県には間のようなところもあるのです。主に沿岸部になりますが、都市機能を一定備えている、でもすぐ自然が横にあるそういうようなところ、そこもしっかりと集約をしながら、都市構造を作っていこうということをいっています。どこにいても里でもまちでも豊かな暮らしができるということです。

それから「適散・適集」というのは、今回のコロナで改めて認識をされるようになったと思うのですが、いわゆるどんどん集約することによって、密を作ることによって生産性を上げていこうという動きがこれまであったわけです。

ところがそれが非常にリスクが高いものであったということもありますし、東京という観点からいうと、東京は成長のエンジンとよくいわれるのですが、平均成長率は、都道府県の中で全国の平均よりも低いのです。足を引っ張っているのです。実は生産性を上げていないという状況があったりして、それを変えていく必要があるのではないかと、そういった過度に三密になっている状況から、分散というのは非常に大事なのではないか、これは経済的にもあるいは人間らしさという観点からいっても、分散というのは重要で、開放的で快適な環境が必要ではないか、それを実現する意味でデジタル技術がやはり鍵になって、今テレワークとか何だとか普通に入ってくるようになりましたが、空間的な制約だとか、時間的な制約を乗り越えることができることが実証されてきたということです。

一方で、イノベーションとか新しい知恵を生んでいく上では、人が実際に顔を合わせて議論したり話をすることも必要で、よく雑談からいろいろなアイデアが生まれるということもありますが、ビデオ会議だけだと、なかなかそういうことも難しいということもあったりして、一定の集積とか集約、集中も必要だと、ただこれまでの過度なものではなくて、過疎ではない適切な分散、過密ではない適切な集中、こういうことが今新しい社会のあり方として、必要になってきているのではないかということであります。

広島はそういう意味では、非常に都市ももちろん過密でもないですし、すぐ近くには本当に豊かな自然がある、分散ができる環境がある。そういう新しい求められる社会の姿、そこのフロントランナーになっていこうということです。

それを具体的に、どういうふうに進めていくかという上での３つの視点がございまして、先ほど申し上げたように一つはデジタル技術、これは今の「適散・適集社会」を作っていく上でも大きな鍵になってきますし、いろいろなイノベーションだとか付加価値を生み出す新しい姿を考える上でも、デジタルトランスフォーメーション、デジタル技術が非常に重要になってきます。

それから「ひろしまブランド」これは物のことをいっているわけではなくて、広島ってどういうところなのかを皆さんにイメージしていただく、こういったことが重要だということです。

全ての活動の土台は人なので、あらゆる分野で人材育成が大事だし、あらゆる人生のステージの中で学んでいくことも大事だと考えています。

施策の領域は 17 に分けていろいろと検討をしています。これがそれぞれ独立して動いているわけではなくて、お互いに影響し合いながら相関していると、相乗効果を生むことが必要だし、できると考えています。

具体的に例えば子ども･子育てでいうと､ネウボラの話をここに上げているのですが、子どもに対する支援ですが、全ての家庭を妊娠期から子育期まで切れ目なく見守り、支援するネウボラの拠点が、全市町に設置されて子育て家庭に関わる全ての医療機関、保育所等々と連携して、子どもたちを多面的・継続的に見守ることにより、必要な支援が届けられている。これが 10 年後の目指す姿です。やや抽象的かもしれませんが、ただ、かなりネウボラの拠点が全市町に設置されているとか、関連する機関がみんなで多面的に子どもたちを見守っていますとか、その結果、必要な支援が届けられているとか、そういうふうに分解していくと結構具体的になってきて、それに伴う全体的な目標としては、安心して妊娠、出産、子育てができると思う人、これを我々は継続的に調査をしていますが､現在８割ぐらいの方に､安心して子育てできると思っていただいていますが、８割も結構高いと思うのですが、これを９割に引き上げていこうと、それに関わるいろいろな指標を実際に定めて、指標を見ながら施策を進めていこうと、同じようなことか

ら教育とか、これは新しい教育、学びの変革のことをいっていますが、学びの変革が定着して、全ての子どもたちに、これからの社会で活躍するために必要な資質・能力が着実に身についています。これが 10 年後に目指す姿としていく。

今、学びの変革は始まってだんだんと県内で展開をしていますが、それが根付いているということが 10 年後の姿で、関連するいろいろな指標があります。

もう一つ観光の例もあります。

こういった形で 17 分野ごとに、17 分野の中でいくつか別れていて、それぞれ目指す姿を定めて進めているということです。

いずれにしても先ほど申し上げたように、これはもちろん県の計画ですが、実際これを実現していくのは一人一人の県民の皆さんだとか、事業者だとか関連する団体だとか、そういった皆さんが活動して始めてそこにたどり着く。それぞれもちろん考えが違いますから、いやいやそんなことに縛られたくないよと思われるかもしれません。かといってみんながバラバラのことをやっていると、社会は大きく動いていかないということもあります。

ですから広島県がある程度の姿を示して、こういうふうになったらどうですかと、良い社会が描けるのではないかと提示をさせていただいて、できるだけ多くの皆さんに、そこに共感していただければ、そしてそこに向かってみんなが力を合わせていけば、そういった社会に到達できるのではないかと考えているわけであります。

結果として県内どこに住んでいても、県民の皆様一人一人が夢や希望を実現できるといった広島に、これはみんなでやっていきたい。そういうものが今回のビジョンであるということでございます。

続いて、意見交換に移らせていただきたいと思います。

初めに参加者の皆様お一人ずつ、５分程度ご意見あるいはご提案をおっしゃっていただきまして、発言が一巡したら、残りの時間で全員で意見交換をしたいと思いますので、よろしくお願いします。

発言の順番は決めさせていただいていますので、恐縮ですが順番に座ったままでお願いします。

それでは初めに、出張一樹さん。今日は出張さんが２人いらっしゃる。一樹さんから、まずお願いいたします。

参加者①

出 張 一 樹： それでは失礼します。ご紹介いただきました出張一樹と申します。

このような場で話をする機会はまずないだろうなと思って、とっても緊張しているのと、それと合わせてしっかり感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

10 年後の目指す姿ということで、若干お話させていただきたいのですが、その前に何を話をするのかということで、簡単な自己紹介をさせていただきたいのです。

現在私は、この安芸高田市高宮町で専業で農業をしています。専業で農業を始めたのは３年目で、水稲と施設栽培、ハウスでちんげん菜を作っています。もともとは工業高校出身で全く農業と関わりがないところで、それこそ通信設備の保守とか施工という仕事をしていました。

親の体調等々もありまして実家に戻るということで、こっちでどこで働こうかといったときに、JA に就職をしまして、そこで始めて農業に携わっていくことになったのですが、主な仕事が営農指導をしておりました。

JA の立場として地域に関わっていく中で、どうしても高齢化も増えてきまして、自分の家の周りでも、田んぼを預かってくれという方がどんどん増えてきた中で、自分の中でそろそろかなと、農業１本でやっていこうと始めたところでございます。

そういう立場なので、今日は主に農業について語らさせていただきたいと思うのですが、私の 10 年後の目指す姿は何なのかなと今回改めて思ったのですが、農業をなりわいとして若い人から一つの職業として選ばれる。そういうスタイルを目指していきたい。

どうしてもネガティブなイメージ、よく言われる３K。汚い、きつい、格好悪いというイメージが強いのですが、それをどうにかして、格好いい、稼げる、感動できる、この３K に変えていきたいなというのが私の思いで、あとプラスアルファで効率的とか簡略的という５K でもいいかなと思いながら、今やっているところです。

その中で魅力ある農業ということで、私がいつも思っているのが、つなぐ、つながる、

つなげる、この３つが僕の理念というかそういうところであって、つなぐというのが先代からやってこられたこと、先輩の意思であるとか地域の伝統であるとか、そういうところをしっかりつなぐ。

つながるというのは、生産者と消費者であるとか、同業のつながりも、もちろんですが、異業種とのつながりもすごく大事なので、そこもしっかりやっていきたい。

つなげるというのは、そのままですが、未来、次世代へ農業をつなげられたらいいなと思いまして、この３つを自分の中で理念的に思っていまして、それで農業を進めています。

今日は５分で本当に時間がないので、いろいろと課題とか方法ってあると思うのですが、特に中山間地域における農業、持続可能な人材の確保であるとか、先ほどもありましたが ICT の活用、広島として安芸高田として産地の確立がどうしても必要になってくるかと思いまして、特に産地の確立の中で、私が高宮の出身なので高宮のことをお話させていただくのですが、昔から広島県は日本三大酒どころで、特に西条、西条だけではなくて広島県全体で呉とか酒屋さんがたくさんあって、そこに供給する酒造好適米というものを高宮が広島県内の約４割、面積で約 220 ヘクタールぐらいになるのですが、産地となっていますので、ここを基軸にやっていければなと、産地だけがよくても駄目だし、酒屋さんとの共存ができて、それこそ地産地消で広島でいければなと、いろいろと取り組みをしているのです。

その中で特にやっていきたいのが GAP 認証というもので、安心・安全な農産物をうたえること、農産物の GI、地理的表示を取得できれば、日本酒ではあるのですが、米では GI の取得がないので、こういうことに今後力を入れて取り組んでいければと思います。

終わりに、農業している人ももちろんながら楽しんでいる、農業したい人が増えて、農地が農地として存在する 10 年後が、僕の目指している農村スタイルとになるので、これを目指して頑張っていきたいと思います。そのためにも広島県、安芸高田市、多くの皆様のご支援とご協力をお願いして、終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

湯 﨑 知 事： ありがとうございました。

まさに今日申し上げているような、夢、希望それをしっかりと描いておられて、いかに我々が後押しできるかということかなと感じました。

それでは続いて、水藤さんよろしくお願いします。

参加者②

水　　藤： 今日は、このような場に呼んでいただきまして、ありがとうございます。

私は吉田町に住む、水藤と申します。よろしくお願いします。

私が今、２つの団体の活動に関わっておりまして、１つが郷野小学校再生プロジェクトと申します。もう１つは石原農援隊というグループです。その中で感じた地域の元気に向けての思いを、お話させていただきたいと思います。

まず郷野小学校再生プロジェクトについてですが、お手元の写真、これが私が卒業した郷野小学校です。一昨年の３月に学校統合で閉校しました。校舎が建てられたのが 1935 年、これが建築当時の写真です。今も昔も変わらない姿、今も郷野に立っています。

閉校するまでは、全国で２番目に古い現役の木造校舎ということで、非常に建築関係の方も興味を示されております。閉校したのち、なかなか行政としても地元の振興会のほうも、この大きな建物を使うことに対しては少し腰が引けた状況で、なんとかこういう立派な校舎を残していかなければいけないということで、私たちが活動しております。

ただ、残すというのではなくて、この校舎を中心に地域の衰退にブレーキをかけたり、さらに地域を元気にする、そんな中心的な役割をこの校舎に持たせたいと思っております。

かといって、そんな大したことはしていないのですが、中心になっているのは毎月日曜日に１回集まって、学校をそうじしています。木造の建物は空気がよどむと痛みが早いもので、毎月１回、校舎の窓を全部開けて風を通したり、くもの巣を払ったり廊下を拭いたりしております。昨年秋にこの校舎を活用して「アートまつり in ごうの」というイベントをやったのですが、非常にたくさんの来場者がありまして、地域の人もびっくりしているしだいです。そのときの様子が廊下の雑巾がけ競争ですね。

このイベントには大体 50 名ぐらいお手伝いいただいたのですが、最初は私たちのメンバーだけだったのですが、そこから家族や消防団、読み聞かせグループとか大学生と

かお寺さんとか、たくさんの方たちに協力していただいております。

こうやって月に１回、そうじに来る人にしてもイベントのスタッフにしても、皆さん非常に笑顔でニコニコと作業をしてくれているのです。やはり楽しい夢がある、こういうことが一つのキーワードになってくると思います。

もうひとつのグループですが、石原農援隊、石原というのは私が住む集落です。37 世帯で約 100 人、高齢化率が 45%。安芸高田だけでなく、広島県どこにでもある小さな集落で、少子高齢化で人口減少、空き家、耕作放棄地、おまけに今は鹿とか、いのししの獣害、全部うちの集落に当てはまるのです。

２年前ですが、ある方が「これはこのままだと、どうもならない。今いるわしらで、うちの集落なんとかしよう」と口火を切られまして、当然住んでいるみんなも心の中では思っていたのですが、なかなか動き出せなかったのです。その方のひと言で、寄って一杯飲みながらいろいろ話をした結果がこの石原農援隊です。農業を援助する部隊の隊です。

メンバーは、若いものがいないので 40 代から 80 代の 18 名集まりました。最初は草刈りとか小さなことをしていたのですが、今年から１年株主プロジェクトというのを始めました。

耕作放棄地を借りまして、消費者を招いて田植えをしたりして、耕作放棄地の解消や消費者との交流、にぎわいの創出、集落の団結、農作物の販売などいろいろなことに可能性が広がっていくと思っています。

結局何が言いたいかといいますと、地域が元気になるには楽しいこと夢のあること、それとは真反対になるのですが危機感を共有すること、いちばん大事なのがキーパーソンですね。そういう方をどうやって探して育成していくかということです。市長のように銀行を止めて帰って来る人がいるのならいいのですが、そうそうはいないですから、そういうものを地域から探し出して、行政から援助とか制度の助けとかをしていただいて、なんとか地域を元気にしていきたいのが私の思いです。

どうもありがとうございました。

湯 﨑 知 事：　ありがとうございました。

今、各中山間地域で、いろいろな課題が出ている、その取組をお話しいただきました。

それでは続いて、竹本さんお願いできますでしょうか。

参加者③

竹　　本：　ありがとうございます。竹本です。

私は安芸高田市が好き、広島が好きという人を増やしていきたいと思います。

今私は、安芸高田市でいろいろなボランティア活動をさせていただいております。その中の一つ、安芸高田市子ども会連合会では、市内の子どもたち大体４年生から中学校３年生が対象ですが、年３回の宿泊研修と日帰りの研修、親子の体験活動をしています。

ただ主な活動場所であった安芸高田市の自然の家が閉鎖になり、活動場所がなくなっております。リスクの面から活動内容もどんどん制限が出てきています。

ただ、子どもたちの輝く目を見ていると、やっていてよかったといつも感じています。子どもたちと話していると安芸高田市のことが大好きなのです。このままずっと大好きでいたくれたらいいのですが、そのためにも活動を頑張っていきたいと思っているのです。

そうやって話をしていると、安芸高田市にある文化活動とか自然のこととか触れ合う回数も少なく、地域の方との交流も少ないです。これは私が活動してきますといっている中で、それはやっていなかったという反省する面でもあるのです。

実際、地域の方を講師に横笛づくりとか神楽体験。神楽は安芸高田市の全員の人がしているわけではないので、こうやって体験するとすごく喜びます。すごく反応がいいのです、目がキラキラしています。

体験活動は何があるかなと思ったときに、特別なことはないのです。農作業とか季節の行事とか創作活動、生活の全てが体験活動になっています。ただ、私一人ではこの体験活動できないので、地域の方に先生になってもらわないと、なかなか活動ができません。こうやって地域の方に先生になってもらうことで、地域の魅力発見、次世代の後継者となっていくのではないかと思います。

なかなかコロナ禍で活動が変わってきていて、現在休止中になっています。これから

このコロナ禍で、どうやっていけるか、何ができるか考えていきたいと思っています。
私、今コロナが終わって活動ができるといわれたら、いろいろと考えているのです。安芸高田市の中で町めぐりウォークラリーとか、ニュースポーツ体験とか、先ほど水藤さんが言っていたのですが、郷野小学校すごくよくないですか、あの芝生でキャンプとか、いろいろしたら楽しいのではないかと思っているのです。
やりたいことがたくさんあるので、今日皆さんに会えたので、皆さんを引き込んで活動していきたいと思っております。
私がこうやって活動していくことで、というより皆さんを巻き込んで、逆に私、水藤さんに郷野小学校の再生プロジェクトに巻き込まれつつあるのですが、そうやっていくことで地域の人材になり魅力発見になり、そしていろいろな発想力を持って活動していくことが、安芸高田市または広島県の 10 年後、20 年後、そして 30 年後につながるのではないかと思っているのです。
ときどき大人になった元参加者から「あのとき体験していたことが、今社会に出て役に立っているんよ。子どもにも体験させたいから続けとってよ」と言われます。それなので頑張らなければと思っています。こうやって離れていっても、安芸高田市のことを覚えていてくれるというのは、これからも活動していきたいという活力になっています。
安芸高田市が好き、広島が好きという人たちを増やしていければと思っています。
皆さん、自然の家がないと、泊まるところがないと困っているのです。何かいい方法があればよろしくお願いいたします。以上です。ありがとうございます。

湯 﨑 知 事： ありがとうございます。
人に注目して、いろいろな活動をしていただいていることかと思います。
それでは続いて、大前さんお願いいたします。

参加者④

大　　前： お願いします。
私は 17 年前に、安芸高田市甲田町に嫁いでまいりました。来年創業 100 年を迎えるおしょうゆ屋です。
東京の実家に帰る際は、よくもみじ饅頭を買って帰りました。それまでは安芸高田市に、これといったお土産がないと感じていたからです。そこに 2014 年ごろ、安芸高田市ふるさと応援の会が発起人となり、市、農協と３者で「温とまと」という商品をブランド化する話がありました。
我々も加工業者として何度もトマトを使った新しい商品を作るよう努力して、今やっと３種類の商品化にたどり着きました。真っ赤なトマトの熱い安芸高田の思いで商品化を進めました。ですが最盛期には 12 件あった生産者さんも３件に激減しました。安芸高田トマトで加工品を作っているところはすでに我々のみです。もう１社あったのですが、今年のトマトの収量激減により長野産に変更されました。
このままでは自社製品はおろか、安芸高田トマトの存亡の危機です。再度ブランド化に挑戦していきたいと、我々も自社で「温とまと」を作ったり、冷凍庫を購入することになりました。
ここに至るまで、いろいろとお世話になり大変ありがたいと思っています。ですがその後の展開については問題が山積しています。市や県には商品開発、デザイン、営業、CM やコンサルタントのあっせん等、バックアップを積極的にお願いしたいと思います。
広島レモンだけではなく、広島安芸高田トマトも全国に広げていきたいと考えております。県や市町村と連携して、東京で開かれる巨大な展示会への出店サポートも考えていただきたいと思っています。他県ではすでにデザインを統一して展示会に出店しています。安芸高田トマトのみならず、広島県のブランド価値も高まると思います。
一般的に住みやすい町、帰りたい町というのは子育てしやすい行政、福祉サービスが行き届いているということですが、私がいちばん大事に思っているのが、稼げる町だと思っています。安定した収入、雇用があってこそ真に豊かな町になると思います。
雇用、就農者を生み出すために、県や市は市民を自立させていく手助けをしてほしいと思います。町が豊かになる、税収が上がることがいちばんだと思っています。私たちもトマトを通して就農者や雇用促進を図っていきたいと考えております。
産業を成長させていくことが税収の増加につながり、問題も解決すると私は思っております。
今、コロナ問題で命が脅かされていて、ワクチンができたとしても、全員が打てるま

でにどれだけの費用がかかるか分かりませんが、税収を上げて強い町を作っていく必要があると感じています。どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

湯 﨑 知 事：　ありがとうございます。

いわゆる６次産業化といわれますが、加工されているお立場から農業について、いろいろな課題を御覧になっているということで、出張一樹さんのほうにも、いろいろとかかってくることもあるかと思います。

それでは続いて、出張雄都さんにお願いをいたします。

参加者⑤

出 張 雄 都：　よろしくお願いします。

まず、今回このイベントを開いていただきありがとうございました。

私はこの吉田町の隣の高宮町に住んでいて、地域の伝統芸能の神楽に取り組んでいます。今日は神楽と行政の関わりについてスピーチしようと思っています。

広島県の神楽は、これまで県の PR や観光事業において重要な役割を担ってきたと思いますが、近年ではそれらに力を入れすぎて、ちょっとした反動が出ているのではないかと感じています。

神楽の舞には物語性がある舞と、物語性のない儀礼や儀式として舞れる儀式舞の２種類の舞があるのですが、観光と神楽が結びついた結果として、始めて神楽を見る人たちにも楽しめるように、物語性のある舞ばかりが上演されて、儀式舞は上演回数が少なくなっている。もしくは見る人にあまり好まれなくなっているという風潮が起こっているように感じています。

しかし神楽とは、本来演劇ではなく神事なので儀式として舞われてきた舞のほうが古い歴史を持っています。そのため儀式舞の上演回数が減って伝承が途絶えてしまうのは、それらの歴史が丸々なくなってしまうということで、非常に大きな損失につながると思っています。

広島県もしくは安芸高田市にはこの先、神楽を PR していくこととは別として、神楽を文化として守っていく、神楽団体が舞を伝えていくことのサポートをするという取り組みをしていただくことも必要になると思っています。

「安心▹誇り▹挑戦　ひろしまビジョン」には文化の保護について、県民に向けて広島県の文化を情報発信していくとありました。しかし先ほど PR によって儀式舞の上演回数が減ったことと同じように、情報発信の内容や、やり方によっては逆に伝承を妨げてしまう可能性もあると思います。

そのため情報発信の内容に気を配っていただくか、もしくは違うやり方を取られたほうがよい場合もあるのではないかと思っています。

もちろん神楽を観光で PR していくことと比べると、経済的なリターンもあまりないですが、広島県が掲げられている、安心、誇り、挑戦の誇りを実現するためには、そうした文化を守っていくことも必要になると思っています。もちろん私自身も、この先何らかの形でそれに貢献できることがあれば、貢献していきたいと思っています。以上です。ありがとうございました。

湯 﨑 知 事：　近年特に注目を浴びている神楽。ただそれだけでは、いろいろな課題があるということをご紹介いただきました。ありがとうございます。

それでは続いて、渡辺さんお願いいたします。

参加者⑥

渡　　辺：　渡辺洋一郎と申します。今日はこのような会を開いていただきありがとうございます。とても貴重な会だと思って直前に申し込ませていただきました。

今日、私がお話させていただきたいことは、ひろしまビジョンに書かれている、目指す姿から、一つ下りた産業イノベーションに関してご意見させていただこうと思います。

先ほど大前さんがおっしゃいましたが、税収の確保というのは非常に重要だと思っていまして、あと産業振興ということは、これからの市町村はやはり自分たちで考えて行かないといけない問題だと思っているので、そこを選ばせていただきました。

自分ごと化するために、今市町村が抱えている問題構造、負のサイクルと呼んでいるのですが、ひろしまビジョンにもあったのですが、指標として県内総生産があったと思います。

それが減るとどうなるかと考えてみたのですが、これが減ると、先ほど大前さんおっしゃったのですが、域内の雇用の創出が停滞しますよね。そうすると生産年齢層って流出すると思うのです。

一方で、もうひとつは GDP が減ると地方財政、歳入ですね、これを外部依存しないといけない。地方交付税交付金とか、国庫支出金とかに頼った市政になってしまう。

政策に使えるお金に限界がある。これをしたくても、できないみたいなことがあると思うのです。

そうすると、教育でこんなことをしたいのだができないということがあると、教育に対する地域の格差が拡大しますよね。そうすると生産年齢層が流出する。これがつながります。

一方で、この地域格差は生産年齢層の UI ターンの数の減少にもつながると思います。

視点を変えますと、ここ安芸高田市の問題だと思うのですが、市政、行政との関わりがない。そこから地域への関心度の低下を招いて、市民、県民プライドの未醸成、これも UI ターンの数の減少につながると思っています。

生産年齢層の流出からいくのは、付加価値を高めることが非常に重要で、それによって産業は進行すると思うのですが、ここが停滞してしまう。それによって、先行投資であるとか新規事業創出がなされない。すると地場企業、産業衰退が起こります。

やはり最終的に GDP が減っていくということ。これが広島県と安芸高田市と自分ができることという観点で、どういった役割を持って活動していけばいいかと考えてみたのですが、まず付加価値生産性の向上、新規事業は作れないというところに対しては、やはり今、広島県の新しい事業は年間、数百生み出されたと思うのですが、成功した事例ではなく、うまくいかなかった事例がすごく重要だと思って、製造業でエンジニアをやっているのですが、不具合が起きると分析をしてそれが起きないようにする。その積み重ねが産業技術の向上であったり、お客様の満足につながると思っていますので、この情報をいかに分析して町と共有するかが重要なのではないかと思っています。

２つ目ですが、ここで優秀な人材の育成の創出が停滞とあるのですが、これがなぜ起きるかといったら、次世代の人材育成が必要なのですが、具体的な施策に落ちていないというのがあると思っていて、僕はエンジニアをやっていますので、実際に地域とエンジニアリングの距離を縮める。架け橋となることができると思っています。

３つ目として、ここ安芸高田市に対するご提案なのですが、市政、行政と関わりがないというところで、住民一体、町ぐるみでの課題解決というところの仕組みができたらいいなと思っております。

まとめますと、１番は先ほども少し言いましたが、思うようにスケールしなかった事業の分析結果の共有をする。取り組みとしては、STEM といわれていますが、STEM とデジタルアートをベースにした教育コンテンツの提供と実施。

安芸高田市の全体の取り組みとしましては、住民と一体で地域課題に取り組むスキーム、こういうことができたら非常にいいサイクルが、減少が増加になって、停滞が促進になって、いいサークルが回るのではないかと思っております。

以上となります。ありがとうございました。

湯 﨑 知 事： 課題と同時に解決方法までご提案いただきまして、エンジニアでいらっしゃるということなのですが、エンジニアらしい分析でありがとうございました。

皆さん本当に貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

フリートーク

湯 﨑 知 事： 石丸市長、今この時点で何かコメントとかご発言あったら、お願いしてよろしいですか。

石 丸 市 長： この調子でよろしいですか、少し硬めですか、もう少し柔らかいほうがいいですか、このくらいでよろしいですか。

早速、これまでの感想をお伝えさせていただければと思うのですが、とても安心をしています。なぜかというと今回、安芸高田市の精鋭６名がここに集まってくださったわけですが、大変心強く感じています。こういう方々が近くにいらっしゃるのであれば、この町なかなか厳しい状況にあるのですが、これから先展望が開けるなと思っています。

せっかくなので現状の話をしておきますと、今ちょうど渡辺さんがお話くださった GDP、私前職で専門で扱っていましたので、少しここを触れておきます。付加価値の合

計が GDP でして、もう少し伝わるように言うと経済規模を意味します。

経済がどれくらいで回っているか、これが小さくなっていくと生活困るよねというのが、先ほどの紙です。GDP を小さくしないためにはどうしたらいいか、結構難しいです。なぜかというと、分解してみると１人当たりの付加価値掛ける頭数なのです。頭数は絶対に減ります。それこそ 30 年後、2050 年ごろには日本全体で１億人を割っていく見込みになっています。ほぼ確実にその数字に近づくはずです。

そうなると最初のほう、１人当たりの生産力、付加価値を高めていかないといけないのです。その意味では、最初の出だしでお話くださった人材育成に関わるところ、端的な言葉で私いいなと思ったのが、格好いいというものですね。人を引き付けていく、その結果、そこで人を育み、付加価値の向上につなげていく、これが基本の路線としてすごく大事だと思う。そのように一連のお話を伺って感じたしだいです。少し真面目でしたね。

湯 﨑 知 事： 以上でよろしいですか。ありがとうございます。

私も石丸市長と全く同感で、とてもすばらしい発表をしていただきまして本当に感謝を申し上げたいと思います。

今日は何か、経済面のテーマが多かったかなと思うのですが、出張さんは農業、まさに農業の付加価値を上げることが、特に自然豊かな中山間地域にとって非常に大きな課題で、そこは農産物自体の付加価値もありますし、加工することによる付加価値の増加も大きな課題ですよね。

まさに人材とブランド化ということをおっしゃっていただきましたが、これも大前さんと共通するお話ですが、本当に広島県の農地の競争力という観点からいうと、やはりかなり工夫をしていかなければいけないと、そのためにはブランド化は非常に重要だと思います。

私は宮城県知事と仲がいいものですから、宮城県に行くと、はるか向こうまで見渡す限り田んぼですよね。しかも真四角の田んぼがずっと並んでいて、こんなところと普通にコスト競争をしても勝てるわけがないということであります。

ただ、広島県は日光が強いし、トマトもできるし気温差が激しいですから、農産物のうまさについていえば、非常に有利な条件があるということもありますので、それをいかにブランド化していくか、大事にしていくか。

お米についても、酒米も兵庫県の山田錦が非常に有名ですが、広島も負けず劣らずの酒米ができますし、今後お酒についても、ワインのように地域性ということがテロワールとワインではよく言われますが、そういうことが求められる世界になっていくだろうと考えると、いかにそれを実現していくかということが非常に重要なことになっていくと思っています。

それから水藤さんは、郷野小学校あるいは石原農援隊という形で地域づくりに関わっていただいていますが、ここはまさに人のお話で、いかに地域に関わる自分ごととして関わっていく人がいるかということが、地域の活力に大きくつながっていくということだと思います。

それは子どものときから育てていこうということが、竹本さんの活動なのではないかと思いますが、すでに水藤さんと竹本さんがつながって、お互いの領域に進みつつあるというのは、本当にすばらしいなとお伺いしました。

広島とか市町レベルで安芸高田市が好きだという人が増える。石丸市長もそれで帰って来られたということだと思いますが、そういう教育であるとかそれを作るのは、やはり地元の皆さんである。竹本さんがおっしゃったことが本当にそのとおりで、今も中山間のチーム 500 というのをやっていますが、これは中山間地域におけるリーダー、みんなを引っ張っていける、そういった人材を作っていこうと取り組んでいて、広島県内で 500 人作っていく。中学校区に大体２人ずつみたいな計算になっているのですが、そういった皆さんがつながりながら地域に関わっていく、その地域の人が先生になる。これが本当に大事なこと。

昔はよく親が「ここにおってもどうにもならんけえ、おまえは都会に出て行けや」と、これでは地域に残る子どもたちはいないということ、むしろ誇りを持って、地域の誇りを持って子どもたちを教育していくことがすごく大事だと思います。それが最終的に水藤さんたちのような、農援隊だとか学校を活用していこうという動きになっていくのかなと思います。

大前さんも、お伺いしていて本当にご苦労いただいていて、先ほど渡辺さんがおっし

ゃっていましたが、いろいろな課題を研究して、取り組んでいかないといけないと思いますが、県はまさに大前さんが課題だと思われたような、販売力の強化だとかブランド力の向上、これをどうしていくのかを専門家の派遣も行っていますので、これは皆さんのチームで作っていただいて、そういった方向に取り組んでいただけると、また GDP も上がっていくことになるのではないかと思います。

出張さん、非常に見逃されがちな側面を指摘していただいたのではないかと思うのですが、神楽ってもともとなんだろうということを失ってしまうと、土台を失うということですよね。

安芸高田は湯治村があって専用の施設がありますが、島根県は、それぞれの神社の舞の舞台にお客さんを呼んで、そこで本来の神楽の姿をみんなに見てもらう取り組みを、結構いろいろなところで行われているのです。

観光ばかりではとおっしゃいましたが、それはそのとおりだと私もそう思います。

ただ、特にコロナ後の観光を考えたときに、ただ表面的なにぎやかで楽しいよねということだけではなくて、本当の意味はなんなのかを問うような観光が、これからどんどん増えていくと思うのです。

ただきれいなもの見るとか楽しいものを見るとかではなくて、知的刺激を求めるということが、これからの大きなトレンドになっていくと思いますから、本当の意味、見せるとか、神楽とともに新舞とともに伝えていくことも、非常に大きな要素になっていくのではないかと思いますので、そういったことも、我々後押しできればと思います。

渡辺さんは、この循環の分析をしていただいて、これはまさに我々が常に悩んでいるというか逆に目指しているというか、今 17 分野といっていますが、もともと現ビジョンではそれを４つに分けて、人づくり、新たな経済成長、豊かな地域づくり、安心な暮らしづくり、この４つがぐるぐる回っていいスパイラルを描いて発展していく絵姿を書いていたのですが、まさにそういうことですね、経済の問題を追求しようと思っても、実は人づくりが大事だったり、あるいは住みやすい地域が大事だったり、そういうこともあるのだと思います。

そういう中で仕事がないと、そうはいってもかすみを食って生きていけないので、仕事づくりが非常に大事だと思うので、今日のお話で安芸高田の場合は農業というのが、これからの大きな鍵となっていくと思いますが、広島県でも稼げる農業を作っていこうと、従業者１人当たりの所得が、少なくても 500 万円あるようにしていこうと大きな目標として取り組んでいます。

安芸高田の中にはいろいろな、ネギの生産とか成功されている方々もいらっしゃいますし、県内にはお米も 40 ヘクタールとか 50 ヘクタール使ってやっていらっしゃる。

そういう若手の農業者の皆さんとお話をするときに、私は「皆さんフェラーリ買ってくださいね」と言っているのです。実際にフェラーリ買った方いらっしゃるのです。ご存じかもしれませんが。なんならトラクター、フェラーリでもいいですよという話をしているのです。

やはり格好良く、皆さん遠慮がちになってしまうのですが、そうじゃなく、みんなが分かるように、分かりやすく農業やったらすごく格好いいぜという、フェラーリがいいかどうかは別として、ちょっと象徴的に言っているのですが。豊かな暮らしができるということを、みんなに示しながらできたらと私も思っているところです。

石丸市長がおっしゃったように、本当に皆さんに思いがあって、こういう思いをこれをいかに実現していくかだと思いますので、それぞれ誇りを持って進んでおられるというところで、県としてもこういったビジョン一致していると思いましたので、皆さんの活動を支えていくことができたらと思ったしだいであります。

ここからまた自由に意見交換ですが、これまででそれぞれ思われた感想をいただいてもいいですし、私も皆さんにお伺いしたいことがあって、これは前回、前々回とお伺いしているのですが、こういったビジョンだとか、いろいろなメッセージをお伝えしようと努力をしていて、こういう会も一環なのですが、なかなか皆さんに伝わっていきにくいのです。

これはどうやったらもっとうまく伝わるかなと、何かアイデアがあったら教えていただきたいなと、まずこれを投げかけさせてもらって、それぞれお互いの中で、こうじゃない、ああじゃないというのがあったらそれでも結構ですし、皆さんにご意見を伺えればと思うのですが。

いかがでしょうか、どなたからでも挙手をいただければ、あるいは私が勝手に指名し

ますが、学校以来当てられることはあまりないでしょう。僕はよく県庁の研修で「手を挙げないと分かっていますから、私が当てますから」と、そうするとみんな手を挙げてくるのですが、今日はそうはいかないかもしれない。

雄都さんどうですか。ありがとうございます。

出張雄都：　指名ありがとうございます。

今日、皆さんの話を聞いていて、やはり先ほど言われたように話の中心が経済なので、皆さんのそれぞれされていること、これから目標にすることは一つ一つ、つながるのではないかと思いました。

例えば課題を見つける、目標づくりというのに渡辺さんの表を用いられて、その課題がどれだけ解決したかの指標に大前さんの商品を使われてという感じで、本当にこれから皆さんどんどん関われば、またそれで成果が出るのではないかと思うほどつながっていると感じたので、そういうことも期待しています。

湯﨑知事：　ありがとうございました。

おっしゃるとおりですよね。それぞれいろいろな活動とか、思いをもっておられる方がいらっしゃるのですが、意外とつながっていないことも大きな課題で、地域でこういう会をやると、これまでチャレンジトークとか、最近だとワールドカフェというのをやっていて、そこで実はつながって、新しい活動が生まれていったりしていますし、先ほどのチーム 500 も、そういったことを狙って、みんなで集まるような会をやったり、ネットワーク化をしたりしているのですが、渡辺さんがおっしゃっていたように、みんなが市全体で、それが取り組めるようになったらすばらしいということです。

こういう場からでも生まれてくるといいなと思います。竹本さんと水藤さんすでに、そういう条件にあるということですね。つながりは本当に大事ですよね。

渡辺さん。

渡辺：　今、考えていたのですが、湯﨑さんがおっしゃっているのは、一方通行だということが問題だったと認識したのです。

市民とか県民が自分が参加している感を出すことが重要だと思っていまして、どうすれば自分ごととか、参加者感が出るか考えていたのですが、安芸高田市をイメージして考えてみました。石丸さんが帰って来られていろいろな取組をされようとしているじゃないですか、先ほど僕も少し言ったのですが、市民と行政が一体となることが非常に重要かと思っていまして、例えば町の問題があります、こんな問題を共有しました、課題を設定しましょう，設定しました。

それを誰が課題を取り組むのですかという話、それをオープンにして、いわゆるエンタメ化してしまえと、そうすると、あそこでこんなことやっているのか、あの人はこんなことをやっているのか、自分も何かやってみたいなとか自分も支援したいなとか、そういう人がひょっとしたら現れるのではないかと思ったりしたのです。

ごく少数で、自分発で取り組む人はいると思うのですが、自分はそうではないけれども支援ならしたいと、月額 1,000 円だったら支援しますという人が 1 万人いたら、それだけで結構お金が入るじゃないですか、それを新しい取り組みしますとか、そういうところに価値を見出してくれる人は、安芸高田市にいるのではないかなと思っていまして、そういったところをオープンにして、エンタメ化して、それで得たお金を回してといったことをすると参加感も出るし、うまく回るのではないかと今ふと思って考えてみました。以上です。

湯﨑知事：　ありがとうございます。

エンゲージメントという言葉があって、自分ごと化するということですが、本当にそうやってつながって、しかもお金を払うと応援したくなる。応援したいからお金を払うというのもあるのですが、お金を払ったら応援したくなるという効果もありますよね。

石丸市長はいかがですか。

石丸市長：　そうですね、まさに皆さんの力を寄せ集めて大きな力に変えていく。今はそれが比較的やりやすい時代になっているのだと思います。

湯﨑知事：　デジタルも含めてですね。

石丸市長：　今そのからみで、先ほどの湯﨑知事のご質問に私なりにお話させていただくと、情報発信をどうやったら効果的、効率的にできるか、やはり今の時代はいわゆるインフルエンサー、これを作り出すのが一つ手かなと、誰がやるのだという意味では、やはりそれぞれのトップ、広島県なら知事、ここなら私と一つ役割を求めてもいい時代ではないかと思います。

例えば私の話を少しすると、先ほどのフェラーリではないですが、市長になって車を買ったのです。結構無理してマツダのスポーツカーを買いました。これはキャラ設定です。こいつだったら何か面白いことやるかな、良くも悪くもとりあえず目立ってみる。真面目な仕事の面でもそうです。

この前、県庁で会議に出させていただいて、少し苦言を申し上げてみました。いきなり出てきた若造が「これでは駄目じゃないですか」と言ってみたのです。あれは私なりのキャラ設定です。

そういう意味でエッジを立てていって、こいつ何かあるのかな、そういう話題づくりも一つ効果があるのではないかと思って、地道に取り組んでいるしだいです。

湯 﨑 知 事： ありがとうございます。

これまでのところ石丸市長は、そこは成功されているように全国にも話題が及んでいると、よその県から話を聞きます。うまくいっているかなと思います。

エッジを立てたコミュニケーションも大事ですし、地道に何度も伝えていく努力も必要かなと思うところであります。

ちなみに、これは自慢なのですが、私が就任したときに広島県の情報が、全国のメディアにのる情報料がお金に換算すると大体 25 億円ぐらいです。これが今 900 億円から１千億円ぐらい上がっていまして、これはいろいろな努力をして広報に取り組みをしてこうなっているのですが、ただ、そこができてもなかなか課題なのは、ブランドイメージでいうと、まだまだ広島県の価値が伝わっていなかったり、例えばお好み焼きだとか宮島だとかということは、皆さんたくさん知っておられるのですが、住みやすいとか、おいしいものがあるよという価値ですよね、その価値に転化したものは、まだ伝わっていなくて、これを進めるために実は今、キリンっていうビール会社、ビール会社と言ったら怒られちゃう。食品会社でビールが有名ですが、広島出身の方に来ていただいて、今でいうと副業ですが、ブランドコンセプトを以前一度作っているのです。それを今作り直してやって、これも市町と連携しながら、それぞれの市町のブランドというものと連携しながらやっていこうと思っています。

さらに難しいのが、施策をいかに伝えるかということです。これは引き続きやっていければと思います。

ほかにいかがでしょうか。大前さん何か言いたそうな目で私を…

大　　前： 今、情報発信といったらインターネットとか、安芸高田市でしたらお助けフォンですかね、あと新聞とかそういうところで拝見することが多いのですが、先ほどもおっしゃったように一方通行ではないですが、こちらから見ないと情報が提供されないではなくて、企業訪問とか、今日みたいな会を開いてくれるのもすごくうれしいのですが、ママ友とかに話したりすると、敷居が高すぎると、緊張しすぎて申し込めないという感じだったので、もう少しポップな感じで集まりを開いていただいたら、もう少し皆さんが参加できる場ができるかなと思います。

湯 﨑 知 事： ありがとうございます。

双方向やっていく上で、ハードルを下げてやったらいいのではないかということですよね。

今日は、You Tube で中継していて、緊張される方は家でそれこそビールでも飲みながら御覧いただいているとうれしいなと思っているのですが。You Tube を御覧の皆さん、質問も受け付けております。今あったらログインして送っていただければと思います。

ネットの問題は、自分で取りに行かないと届かないところがあって、届けることが大事だなと、昨日もそういうディスカッションになったのです。こういった場だと来ていただく必要がありますが、ただネットとはまた違う雰囲気がありますから、こういったこともできるかなと思います。

渡辺さん、どうぞ。

渡　　辺： 大前さんにちょっとお聞きしたいのですが、トマトでしたよね。今の時代は１億総発信時代じゃないですか、先ほど石丸さんもインフルエンサーとおっしゃいましたが、地位的に高い人ではなくても、インフルエンサーになる可能性はあると思っていまして、半分冗談半分本気でいいのですが。例えば大前さんがトマトみたいな頭をして、先ほどキャラ設定とおっしゃいましたが、キャラ設定をすることで、何かそういったことで、もしかしたら知ってもらえる。

今の時代携帯がその人に最適化されていて、アマゾンとかグーグルとか同じようなことが全部入ってくるじゃないですか、あれは発信してもインターネットは、たぶん届か

ないと思っていて、その人の興味あることしかここにはないですから、そうではなくて大前さん自身がキャラ化して発信していくと、何か面白いことが起きるのではないかと思ったりしました。すみません。

大　　前：　そうですね、社員全員でトマト。

湯 﨑 知 事：　バズったり炎上したり、先ほど石丸市長がちょっと炎上商法ですっぽいことをおっしゃっていましたが、いろいろな方法はあるかもしれないです。

大　　前：　頑張っていきます。ありがとうございます。

湯 﨑 知 事：　次回は真っ赤な大前さんが見られるかもしれない。

はい、一樹さんお願いします。

出 張 一 樹：　せっかく You Tube でオンラインで配信されていると、おっしゃってくださったのですが、先ほどから LINE が入ってきまして、残念ながらあじさいネットがフリーズしていると、安芸高田で見られていないということで、配信、情報発信ということも踏まえて、そこの改善はぜひしていただきたいなと、いろいろとクレームが入ってきたので一応お伝えしておこうと思いました。

その後の調査により，意見交換会当日にライブ配信をご覧できない時間帯がありましたのは，あじさいネットではなく，配信側の通信環境が不安定となったことが原因と判明いたしました。

石 丸 市 長：　ということで現場から知事にダイレクトで、当市の課題をお伝えできたと思うのですが、この時代に通信インフラが非常にぜい弱です。

あじさいネットというのは、市が自前で敷設した光ファイバー網なのですが、なぜやったかというと、民間が入ってこられなかったからです。市でやったところまではいいのですが、そこで止まってしまっています。

ばく大なお金がかかるので、これ以上背伸びしても届かないところに今きてしまっていますので、ぜひとも前向きなご検討をいただきたいと思います。

湯 﨑 知 事：　全県に光ファイバー化というので、ケーブルテレビが入っているところも、いわゆる同軸で入っているところは、光に関するので県が応援してやっているのですが、安芸高田はすでに光化しているということになっているかもしれません。

ただ、おっしゃるとおりで、これは知事会でも取り上げて全国的に５Ｇの話もありましたので、通信インフラというのは基本のインフラだと、道路を作ることと同じですよねということで取り組もうとしています。

そろそろ時間にもなってきたのですが、水藤さん何か聞きたいこととかあれば。

水　　藤：　そうですね。私は今の小学校での活動をしていますが、安芸高田市だけ見ても、広報とかで、保育所とか小学校、使っていない支所とか、たくさんの市の施設が使われぬまま放置される現状が、広島県になるともっとすごく大変な数になって、それをお金に換算したら、どれだけの金額になるか私も想像つかないのです。

私こういうことをしながら、なんとか活かすものはとことん活かす。これはどうにもならないなとなれば、つぶすしかないかもしれないのですが、活かすための発想というか、今回平成 28 年から動き始めて、いろいろと行政の方とも話をしたのですが、活かすという言葉を聞いたことがないのです。お金がないから、そういう方針は行政にはないからと、非常に後ろ向きな言葉ばかり聞いていまして、駄目でも考えるのだったら、お金かけられないから一緒に話をしましょうというのが、正直私の気持ちなのです。

いつでもやめることはできますが、とことん住民の人と話をして、前に行こうとか、これは事にならないとか、そういう判断を行政もしていただきたいというのが、私の率直な感想でございます。

湯 﨑 知 事：　ありがとうございます。

まさにそういうこと、寄り添って支えることだと思います。ただ、お金がないのも事実なので、そこは選択と集中が必要になってきて、地域の中で、地域の皆さんが大事に思うことをいかに下支えできるようになるか。そのためにはコミュニケーション、あるいは一緒に取り組んでいく、そういうことが必要なのだろうなと思いました。ありがとうございます。

竹本さんも、いかがですか。いろいろ言いたいことがありすぎて。

竹　　本:　いろいろと聞かせてもらって、渡辺さんとだったらこんな話したら楽しいのかなとか、そっちのほうに動いていて、大前さんのトマトでちょっと野外料理のメニューを作って

もらって、子どもたちと作ったりできなかいとか、それを発信してこんなの作ってみたらとか、今キャンプブームじゃないですか、やったらいいかなとか、出張さんと文化活動で何かできるかなとか、出張さんのところで農業で何ができるとか、水藤さんは郷野小学校でお世話になっているので、そうじがなかなか月１回で大変なので、うちのメンバーと行かないといけないとか、先ほども言ったように、今日こうやって会えたのが、私のメンバーになっているなと、ぜひこれからもよろしくお願いします。

湯 﨑 知 事： ありがとうございます。

この場がそういう機会になると、これもまたすばらしいことかなと思います。ぜひ、つながっていただければと思います。

先ほど申し上げたように、いろいろな会をやっていく中で、実際そういうことが起きて、新しいものを生み出すことにつながっていることがたくさんありますので、やはり課題の一つというか、いろいろと思う人はたくさんいるのだけれども、行動するところにハードルがあって、ただ行動するとそれがさざなみのように、ものすごくいろいろなところに広がっていくことはたくさんあるのです。それをいかに行動するハードルを我々が下げていくかとか、それを後押しできるかということだと思いますし、住民の皆さんの力こそが広島県の力でありますから、住民の皆さんが、ぜひそこを一歩踏み出して、あるいは小石を投げてさざなみを立てて、つながってその波を大きくしていけるとすばらしいなと思います。

今日は本当にすごく思いの詰まった皆様方に集まっていただいて、すばらしい会になったと思います。

最後に石丸市長何かひと言ありますか。

石 丸 市 長： 今日、貴重なご縁を皆さんと私自身も共有できましたので、これを糧にさらにこの町の発展に尽力していきたいと思います。

ぜひともお力添え、よろしくお願いします。

湯 﨑 知 事： ありがとうございました。

本当に改めて、皆さんの貴重なご意見を共有していただいて、ここから希望とか夢が見えたような気がするのです。それを実現できるような我々のビジョンの実行、フェーズにしていきたいと思いますので、また皆様のご協力をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、今日この設定、設営を含めて石丸市長をはじめとして、安芸高田市の皆様に本当にお世話になりまして、ありがとうございました。まさに県、市、住民の皆さんと一丸となって進めていけた事例の１つだと思います。

今日は本当におなかのすく時間にありがとうございました。

閉会

司　　会： 皆さんどうもありがとうございました。

また、You Tube のライブ配信を御覧の皆様に、途中通信状況が悪くなり申し訳ございません。後日、録画をアップいたしますので、そちらのほうを御覧いただければと思います。

それでは、これをもちまして、「ひろしまの未来を語る in 安芸高田」を終了いたします。本日はご協力いただき誠にありがとうございました。